

理学博士 故 五十嵐清先生を想う

伊 藤 十 治

昭和46年12月13日付で、博物館長から五十嵐先生を想うと題して書いてほしいのとの書面をいただいた。いざ筆をとるにあたって、五十嵐先生を語るには、筆者よりも・もっと適任者が多くおられると思われる。私が書いては、生前中のごく一面しか書けない。ただ本文を話題にしてなき五十嵐先生をしのんでいただくよすがにもしてもらえればと念ずるのみである。

先生は、昭和46年6月13日午後2時30分頃 帰宅の途中 鯖江市河和田町にて、突然の交通事故のため不帰の客となられた。つつしんで心から御冥福をお祈りしたい。

<先生の生いたち>

大正 7年8月3日	武生市広瀬町で出生
昭和11年3月	県立武生中学校卒業
昭和14年3月	京城師範学校演習科卒業
昭和14年より	朝鮮公立小学校訓導として教職につく。
その間	短期現役として入隊および除隊
昭和20年	朝鮮総督府水原農林専門学校付属博物教員養成所卒業と同時に日本本土へ引揚げる。
昭和21年	県立今立農学校へ勤務
昭和22年	県立武生中学校へ転勤
昭和39年	教育功労賞を受ける。
昭和44年	福井県教育研究所へ転勤
昭和45年	北海道大学より理学博士を受ける。
〃	教育公務員として永年勤続の表彰を受ける。
〃	福井県内水面漁場管理委員

<先生の功績>

叙勲上申の際先生の功績の項には次のような意味の文があるので参考にあげておきたい。

『理科教育に専念するかたわら、県下各地の動植物、特に北瀉湖、三方湖、九頭竜川流域に生息する魚類(アマゴ、アジメドショウ、陸封型イトヨ、アラレガコなど)についての分類および分布状況調査研究に没頭した。また魚類学会、水産学会、動物学会員として研究成果を世に問うこと

もしばしばであった。わけてもその半生を傾注した学問的労作「日本産トゲウオの比較形態学的研究—特に鱗板の変異と発達にもとづく進化について—英文」がある。これは、内外の学者の大きな関心をあつめた卓越した研究でその業績によつて理学博士の称号が与えられたのである。

さて、当博物館との関係はどうか、博物同好会会報に報告された論文をあげてみるとおよそ次のようである。

- (1) 福井県下におけるマミズクラゲについて 第3号(昭、31)
- (2) 福井県の淡水魚 第5号
- (3) 鱗相より見た宅良川のヤマメとアマゴについて 第6号
- (4) フナ (*Carassius carassius* L) の鱗相に見られる一、二の知見 第8号
- (5) 松岡でとれたアジメドジョウ *Cobitis delicata* NIWA とイトヨ *Gasterosteus aculeatus* LINNEAS 第9号
- (6) 北潟湖の魚類相 (1964・3・10) 第11号
- (7) 九頭竜川上流の水没地区のアジメドジョウ *Cobitis delicata* NIWA について 第12号
- (8) 福井県産タナゴ属魚類について 第13号
- (9) 柴着について 第14号 第15号
- (10) 水月湖の魚と地引網 第16号
- (11) 糸魚を求めて 第17号
- (12) 北潟湖のバラタナゴ *Rhodeus ocellatus* o (KNGR) について 第18号(昭、46)

なくなられる前一(昭和46年6月9日)に先生と共に博物館を尋ね、館長の3人の中で福井県内の淡水魚標本を寄贈しようと先生から申し出があつたのは、今から思うと遺言されたと思われ、その申し出を実現すべく整理中である。

先生は博物館囑託ではなかつたが、当博物館主催の採集会行事などには積極的に参加され、クラブ指導にもとても熱心であられた。例えば、魚類についてだけでなく、昭和31年頃の探鳥会に武生高校の生徒を連れてこられた記憶がある。また昭和31年には相模湾臨海実習を実施したときの先生の勉強ぶりは今なお話題になる。網ほし場へ行って採集するときには他の人のあとになってしまうとよい標本がとれないので参加者がこっそり出かけたものである。その代表者の一人に先生がおられる。また磯採集をされて1斗かんに4個ほどの中にぎっしりとつめられた、武生高校の標本にされた。横浜国立大学付属真鶴理科教実験所に福井の先生方が余りの熱心さによって実験所附

近の生物は荒されてしまったとひやかされたものである。昭和33年には、博物館関係者だけの総合採集が田烏海岸で実施したときに先生一人が我々の仲間にはいり採集されたことなど数えあげると記憶は次々とたぐられてくる。生物研究のために思いついたら、どんな困難性であろうと目的を達成すべく情熱をもって調査研究された先生である。また一面では、恩師・後輩に対しては礼儀正しく、しかもとても親切に指導して下さった。例えば、愛知教育大学の小林先生に魚類研究の手ほどきを受けられ、将来の魚類研究の指導を受けている矢先に小林先生がなくなられてしまった。大へん先生はこまられた由。なくなられたあとにでも名古屋方面を通るときには必ずといってよいほど小林先生の墓前に花束をそえるといったことが筆者も2、3回汽車の中で逢っている。後輩に対しても適切な御指導・御鞭撻をされその恩恵に預ったもの数多く筆者もその1人である。しかも筆者にはなくなる前3ヶ月ほどは机をならべておって人一倍いろいろと御援助していただいた。その意味では今でも先生がここへ帰ってこられるような気がしてならない。おしい先生をなくしたものである。

註

逝去される数日前に、博物館を伊藤氏と二人で尋ねてこられ、その折の淡水魚標本寄贈の申し出が、残念にも遺言となってしまった。そして奇しくも命日の6月13日(一周忌)に、奥様の手から当館に現品が手渡されることになっている。

この貴重な標本を将来永く保管して、この道の研究者の資料としても役立てることをもって先生のご高志に報いたいと思う。

館長記